

〈近世女性史資料 (2)〉

和漢
繪入 女訓孝經教壽 (1)

——書誌・翻刻——

黃色瑞華*1
若林俊英*2

*1 城西大学教授・主任研究員

*2 城西大学女子短期大学部助教授

一 書誌

所蔵 城西大学国際文化教育センター

書型 大本。縦二五、八センチ、横一八、一センチ。

表紙 厚紙の上に縹色無地の極薄紙を貼る。中央上部に挿入図等の目次を貼る。

の目次を貼る。

題籤 左肩。赤茶渋色四周枠。縦一九、七センチ、横三、九センチ

チ

和漢 繪入 女訓孝經教寿 全

綴糸 赤茶渋色木綿糸一本掛。

序 本文と同一料紙二丁。一丁表を表紙裏に貼付ける。高蘭山翁

演。文政壬午春(翻刻参照)。

内題 女訓孝經 八隅山人述

丁数 全四九丁(墨付九六面)。内、本文四〇丁。

本文各面 五行。上段に挿図・注記。

本文匡郭 縦二二センチ、横一五センチ。

内、上段(縦六、四センチ)に注。

本文柱刻 女訓孝經 三〇四十二。

奥付

日本橋通壱町目 須原屋茂兵衛

東都書肆 両国吉川町 山田佐助

神田鍛冶町二丁目 北嶋唯四郎

芝三崎町 和泉屋市兵衛

芝神明前 岡田屋嘉七

二 翻刻

凡例

1 「和漢 繪入 女訓孝經教寿」の忠実な翻刻を旨とする。本文にあつては、句読点も原本のままとした。

2 使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるようにした。

3 漢字ルビもすべて原本のままとした。

4 紙面の都合上、本文の行移りのみ原本どおりとした。丁移り・表裏の別は、「1オ・1ウを以って示した。

〈序〉

それ女子は生涯人に随順べきものなれば、父母の許に在間、行義正しく教ざれば暫くの宮仕にも主君の心に應ぜず嫁しても親夫の意に従はず遂には身の周邊を失ひあらぬさまに零落し、父母親族迄の恥辱を貽す。此時切に悔れども暨ず。是何の故ぞ。其ことば給て、父母たゞに誓して教のなければ也。いにしへ孔門の高弟曾子ハ至孝の人にして孝經を著し、是に慣て唐土に後世女孝經十八章の書あり。今此冊ハ、或人彼十八章の意にもとつき

表紙



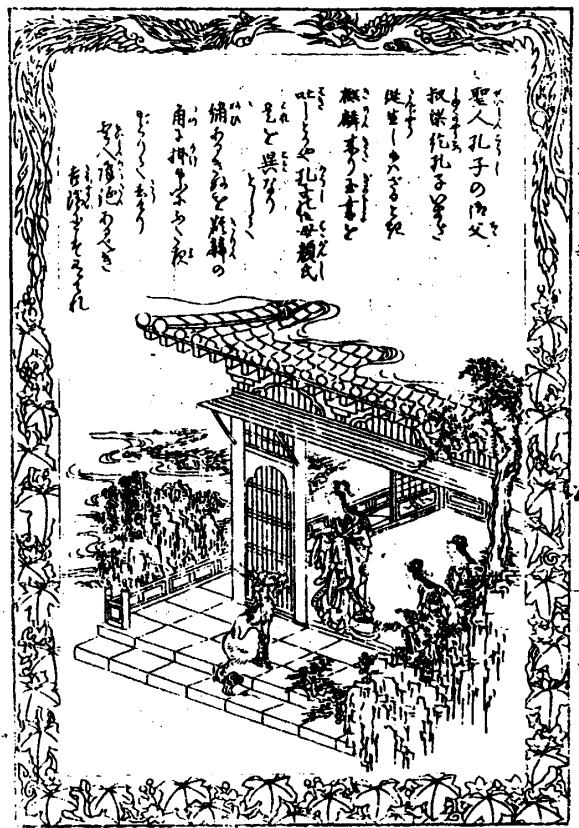
女訓孝經 八隅山人志

剛柔明義章第一

孝は百行の本。

万善之源ありて凡の

善事皆孝より始る



聖人孔子の徳父
叔梁紇孔子の母
生むるは父と母
無難なりとす
此の如く孔子は
父と母とを
備ふるを徳の
角とす

て、日のもとの言葉に和解つゝ貴きより賤きまでの孝道を説く也。慎でこれに従ハゞ宮仕には男子に勝る忠烈を顯し、他に適ては孝婦貞操の名を以て父母の名を揚、子孫萬世の繁栄を基せんこと鏡中に影を見るが如くならん。

文政壬午春

高蘭山翁演

印 印

婦女四徳

一ウ(図あり)

婦徳

心の善貞順を云 夫の心をやハラゲ一家よくをさまり あはれ

ミの心ふかく日々行ひ道にかなふは 大徳を備し婦女なり

婦容

身分に應ししなかつたり廻しよくいやしからぬをいふ 婀娜た

る媚かき風俗をいふにあらす 容に威儀そなふるハ婦女の一

徳也

婦言

女の多言多弁、口家をやぶり國を亂る 其ためし少からず 然

るに言をつしミ人に対してあいさつあいさう程よく言語正しき

は婦女の一徳とす

婦功

功ハいさほし也 女の功業をしあげて用をなすをいふ 后夫人

といへとも養蚕し糸くり衣服を手づからぬひ給へり 紡績把針

のわざにたけたるハ婦女の一徳とす

(下・左)

○唐土廿四孝の書に云

家貧にして老母あり。(図あり)

母齒ぬげれば食事

成がたし。故に嫁乳を

以て養育す。因て

小児のやしなひに乏く、

心をなやみ、ぜひなく

夫に其よし物がたり穴を

堀、子を埋ん事歎しく悲みに

たへざれ共、母の命に替がたしと

夫婦心を合せ人目を忍び夜二入

野辺に行て穴を堀、子を埋んとせしかば、

黄金の釜を得たり。是天道の御恵、

孝心の徳如此和漢共其ためし多しと也。

一オ

○相模守時頼の母禪尼ある日に時頼を

招き、やぶれし障子を手づから切ぬきて

張玉ひしに、傍なる人申されけるは、

何某に仰付られ候へと申されけれども、

其ま、自ら張かへ玉ふとなり。

万民の安悦を恵み玉ふ仁心の

深き御事、世を治るの儉約の

本道をしるしめす賢徳ハ實に

聖人の心に通ずべし。依て天下を

保ち治る程の御子をもたせ玉ふ也。

誠に凡人ならぬ女性とぞ吉田の兼好も

書きつた侍りぬ。

一〇ウ

○太公望は殷の紂王の無道を選
居所さだかなく身貧に
(圖あり)

ても天の命を樂しみ、困窮を
聊も厭はず、世を曲て事を
爲ずして賤き肉の切賣して

世を送りけれバ、世の人は是を
役に立ずといふ異名を唱けるを、
女房うとましく思ひ、夫婦の縁を
きるべき事を頼む。太公望是

かれが好む所せひなき事と、
離縁し玉ふ。其後七十歳過て文王
用玉ひて、天下を定め齊の國を賜り宰相に上り
車に乗ける。女房再縁を結ぶ事を

願へども、不義の罪ありとて天命を
恐れて免し玉はず。是女の慎むべきこと也。

一 二オ

○聖人孔子の御父

叔梁紇孔子いまだ

誕生し玉はざるるとき

麒麟來り、玉書を

吐しとかや。孔子の御母顔氏
是を異なりとして、

繡あるきぬを麒麟の
角に掛玉ふに、ふた夜

やどりて去けり。
聖人降誕あるべき
吉瑞にこそ有けれ。

女訓孝經

開宗明義章 第一

夫孝は百行の本。

萬善の源にして。凡の

善事皆孝より始る。

なり。親に事て孝ある

ものは。夫舅姑に事て

孝貞にして。其外の

ことにおるても誠あり。

故に忠臣ハ孝子の門に

出るといひて。万善悉

これより生ずるを以て。

聖人の教にも孝を

第一とし給ふなり。抑

孝は天地に廣く。人倫に

八隅山人述

一 二ウ

一 3オ

一 3ウ

一 4オ

厚ふし。鬼神を動し。

禽獸を感じ。恭禮に

近し。三思ひ後に行ひ。

其勞を施す事なく。

其善に伐らず。和柔

貞順。仁。明。孝

過たる徳ある事なし。

しかるに世の人。或は

妻子に心を傾け親兄の

敬ひを失し。或は我身を恣に

せむとて義理を顧ず

これみな恩を忘れて

不孝をいたすなり。夫

はじめて母の胎内に

やどりしより。生れ

出て襁褓の中にあり。

竹馬の戯れ疾病の

患。父母のおもひ更に

諭がたし。心をひやし

魂をけして。幾たびか

涙をぬぐひ幾度か身を

こがして。漸育あげ物を

「6オ

「5ウ

「5オ

「4ウ

慈。此道に

學しむる其子として。

親既に年老力衰へ

老耄。し拙しとて嫌ひ。

病によりて行歩かなひ

給ハねども。立居にも

心つけず。早く死せよ

かしと思ふ。かゝる輩ハ

縦養ふといふとも。犬

鶏を飼ふが如し。親を養ふ

ことは。烏だにもやしなふ

ぞかし。妻子の愛に忍

身を恣にせむ事を求て。

梟の母を喰がごとし。

不徳不。信におそろしく。

其父母夫舅。姑にあたり

侍らバ。子なきにはしかじ。

况や身を慎まず咎を

蒙り。世に恥をうけバ。

父母の身をも敗傷ると

いふべし。返くも慎ミ

給ふべし。愛を以孝行を

人倫第一の道とするに

「8オ

「7ウ

「7オ

「6ウ

よつて。能孝を盡すに

おゐては。天地も感應

ましく。家富榮。これを

身を立るといふなり。

后妃章第二

古の徳ある女御后は。

賢明の婦徳を持ち。

其色に淫せず。臣下の

賢をすゝめ。慈悲の

こゝろふかく。民を憐ミ。

朝暮に君の不徳なからん

ことをおもひ給ふ事。

關雎。麟 趾の詩に

詩経の章の名也 同上

如くにして。是后妃の

孝なり

夫人章第三

尊に居て儉約を能し。

位を守りて私なく。

其勤勞を審にし。其

視聽を明にし。古書の

教をまなび。絲竹の

一 8ウ

一 9オ

一 9ウ

一 10オ

一 10ウ

芽出たきを愛主君の

身に殃害なからむ事を

はかり。其儀を失はず。

よく子孫を和らげ。其

先祖を恭敬ひ。邪を

閉て其誠を存する。これ

夫人の孝なり

邦君章第四

君賢にして夫人婦徳

あれば。家治國安。宗祖

鬼神福を賜ひ。五穀

豊熟にして民悦これ

君よく法令をまもり

給ふの徳なり

庶人章第五

婦人の道は義理の

二をよく辨へ。人を先にし

己を後にし。夫舅姑に

能つかへ。兄嫂女公を

敬ひ織縫紡績の事を

つとめ。万事儉にして

費を省き。家内和同し。

一 11オ

一 11ウ

一 12オ

一 12ウ

召つかふものを憐ミ。

他人を敬ふは。是庶人の

妻の孝なり

事舅姑 章第六

女子の舅姑に事るや。

敬は父とおなじ。愛ハ

母と同ふす。是を守るは

義なり。これを執は禮なり。

夜は遅く寢朝ハ早く

起。盥漱 衣服を以て

みまひ。機嫌を窺ひ。

冬は温にし。夏ハ清し。

昏に定りて晨に省ミ。

敬をもつて内を直し。

義を以て外を方す。

禮と信とをはなる事

なし。婦人は夫の家を

我家とする故に嫁を

歸といふ。我家に歸ると

いふ事なり。故に夫の

家に行ては。舅姑を我親

よりも重じ敬ふ事。

婿たる者の孝なり

三才章第七

天の經と。地の義と。

人の行とを。天地人の

三才とはいふなり。これを

もつて人みな其行を

慎ずむバ有べからず。

夫を天とし仰事するは。

なを地の天の恵みに

よつて。萬物を生ずるの

理なり。それ婦人は

別に主君なし。夫を

主人として敬ひ。夫の

教訓に叛ざるは。陰の

陽に隨ふ道理にて。

玷べからざるの道なり。

返くも夫に逆て。天道の

罰を受へからず

孝治章第八

古の淑女の孝を以て

うちを治るは。臣下の

妻妾を卑み遺ず。況や

14ウ

14オ

13ウ

13オ

15オ

15ウ

16オ

16ウ

17オ

娣姪に於てをや。故に

親類縁者と睦して。

人々心に懼び敬を

以て。舅姑夫のころに

かなひ。嬢下妯召仕の

恕。慈悲を専とし。

自ら嫉妬の心なき故に。

夫の行ひもおのづから

正しく。家内和同し。

福ひ日々來り。禍亂

起る事なし。これを

孝をもつて上下を

治るといふ

賢明章第九

古賢明なる婦人は。

君の過あれば時を

うかゞひ。事によそへて

善を進め惡を退け。

愛妾おほしといへども

假初にも嫉妬のころ

なく。自らよき妾を

進めてあしき妾を

遠ざくる事をなし。

臣下の過を顯さず。

俊才をあげ愚昧を

憐ミ。下鄙をして越度

なからしむ。是賢明の

婦人の孝なり

紀德行章第十

古の賢婦人は。上に

居て驕らず。下として

亂れず。醜にありて

争はず。夫に事るや。

貞實にしてかみ容

おとなしく。立居振舞

もの靜にして。外を

慎みうちをまもり。

湯浴飲食のをりも。

父子兄弟の禮を慎ミ。

言と行とに玷こと

なけれバ。婦人の禮義

備り。はづかしめらるゝ

ことなし

五刑章第十一

19ウ

20オ

20ウ

21オ

21ウ

五 刑の屬三千。つミ
不孝より大なるは

なしと。其中にも婦人ハ

嫉妬を大なる罪とす。

この嫉妬あるは自らに

婦徳なき故に。萬事に

つき物さハがしく。本心

暗み疑ひを生じ。夫

舅姑 婣にも其容顯れ

召つかひを憎み。親類

縁者の中も疎になり。

邪見のほむら面に

あらはれ。遂に夫婦の

道も和同せざるは。これ

嫉妬の罪より發るを

以て。婦人七去の首に。

不孝を出せり。婦ハ心を

貞く正直の魂を磨き

柔和第一に人に順ひ内を

理め門より外の事に

拘らす目ハ色に狗す

耳ハ聲に迷ず見と聞

「23ウ

「23オ

「22ウ

「22オ

との欲を禁むへしたとへハ
酒宴の坐見物事の

席に列り麗しき色を

見妙なる聲を聞とも

其時その坐限にするは

妨なし念を残し想を

懸るハ事を越るなり

又嫌疑を避るとて人に

怪しと思れ疑しと思れむ

舉動假初にもすべからず

これ聖人の教なり

廣要 道章第十二

女子の舅姑に事に。

力を盡し。禮をつくし。

娣姒を奉し親類

縁者を疎遠にせず。

上たる人を敬ひ。下を

恵み。稀人をもてなし。

其道にあらざる賄は

うけず。舅姑の賜は

一とをり辭退するハ

禮なれども。其うへ強

「25ウ

「25オ

「24ウ

「24オ

給ふは受べし。又私の

財なく。人の富を羨ず。

他行には面をあらはに
見せず。夜行には燭

なければ行ず。兄弟を

送るとも門の外へ出ず。

出家沙門にも側近く

よらず。これ婦人の

要道なり

廣守 信章第十三

天の道を立て陰と

陽といひ。地の道を立て

柔と剛といふ。陰陽

剛柔は。天地のはじめ。

男女夫婦ハ人倫の

始なり。夫を天となし。

婦を地となす。此道を

かけば陰陽はなる故に。

夫婦の道は。和同を

專要とす。しかれども

男は天徳に則を以て

剛く重婚の義あり。

26オ

26ウ

27オ

27ウ

28オ

女は地に則をもて。

柔なるを道とする故に

再縁の法なし。爰を

以て婦人は。地の天に

随て萬物を生ずるが

ごとく。夫の徳に随て

事ざれば。一生安穩に

終る道なし。ゆへに

婦道の教を守り。信を

盡す事を第一とは

なすなり

廣揚名 章第十四

女子の父母に事に

孝行なれば。嫁して

舅姑に事も亦孝行

なり。舅姑に孝なれば。

夫姨にも其ごとく

にしてむつまじく。

又親類縁者近隣に

至るまで其聞え有り。

世上に父母兄弟の

名をあらはし。天下に

28ウ

28ウ

29オ

29ウ

30オ

譽れを得るは。これ行ひ
内になりて。名後世に

立といふ

諫諍 章第十五

婦人は夫を天として。

廉貞孝義をもて
事といへとも。夫もし

不義非道の事ある

ときは。諫る道古より

其例すくなからず。

舅姑はいかなるひかこと

のたまふとも諍諫の

道なし。是を曲従の

教といふ。曲従とは

まげてしたがふといふ

事なり。夫もし淫亂

不義非道の事 あらば。

我色を和らげ聲を

雅にしていさむべし。

怒怨べからず。夫諫を

聽ずしていからは。先

暫止て後に。男の心

和らぎたるときまた

諫むべし。さすれば

男の心遂に和らぎ。

悪をやめ善にうつる

ものなり。爰を以て

男を不義に陥らせず。

いにしへかくのごとくにして

國家を治め。名を後世に

傳ふる賢女。和漢に

其例おほし。これを

よく諫といふなり

胎教 章第十六

夫人は五常の理を

受て生るゝといへども。

性と習といふあり。故に

善に移れば善人となり。

悪に移れば悪人となる。

これ皆教によるなり。

古の教に。婦人懷妊

すれば。寐るに側ず。

坐するに邊ず。立に

跛せず。邪味を食せず。

一 32ウ

一 32オ

一 31ウ

一 31オ

一 30ウ

一 34ウ

一 34オ

一 33ウ

一 33オ

左道を履ふまず。割きりめ

正ただしからざれば食しよくせず。

席せき正ただしからざれば

坐ませず。目めに悪あしき色いろを

見ミず。耳ミミに悪あしき聲こゑを

聽きかず。口くちに悪あしき言ことを出いださず。

手てにあしき器うつはものを執とらず。

夜よるは正ただ書を讀よみ。朝あしたに

起おきては。立たち居み振ふる舞まひを

正ただしくすれば。其その生うまるるこ

形なり容かたち端はら正ただして。才さい德とく

人ひとに勝すぐるといふ

これ胎たい教きやうを守まもるの

德とくなり

母ほ儀ぎ章ちやう第十七

夫それ人ひとの母ははたる者ものは。

其その禮れい儀ぎを明あきらかにして。

和わ同どうするに恩おん愛あいを

以もつてし。これに示しめすに。

嚴おぞ毅そなるを以もつてし。

動うごて禮れいにかなひ。

言いふことかならず經つねあり。

「36ウ

「36オ

「35ウ

「35オ

男なん子しには六ろく歳さいにして

數かずと方ほう角かくとををしへ。

七しち歳さいにして男なん女にょ席せきを

同おなじふせず。食しよくを共ともにせず。

八はつ歳さいにして小せう學がくを

習ならハせ。十じゅう歳さいにして

師しをとり従したがはしむ。出しゆつ入にふ

毎ごとにかならずつげ。

遊あそぶ所ところ必かならず常ねあり。

習ならふところかならず

業わざあり。居をるには奥おくに

主しゆたらず。坐ざするには

席せきに中ちゆうせず。ゆくに

道みちに中ちゆうせず。立たつに門もんに

中ちゆうせず。高たかきに登のぼらず。

深かかきに臨のぞみ。假かり初そめにも

そしらず。假かり初そめにも

笑わらはず。私わたくしの財さいあらず。

立たつには必かならず方ほうを正ただし。

耳みみを傾かたけ聽きかず。男なん女にょの

別べつをまもり。嫌うたがひを

遠とさけ。疑うたがハしきを避さけ。

「39オ

「38ウ

「38オ

「37ウ

「27オ

巾櫛しんしゆを同おなじうせず。女子によし七歳しちさいにして。四徳しとくを教をしゆべし。一いつには婦徳ふとく。心こころに備そなふる善ぜんなり。二にには婦言ふげん。口くちにいふ詞ことばなり。

三さんは婦容ふよう。身みに顯あらす

かたちなり。四しは婦功ふこう

手てにとる業わざなり。女子によしは

親おやのもとに止とどまるは

暫しばらくの中うちなれば婦道ふだうを

教をしるを。母ははたる者ものの

道みちといふなり

舉きよ悪あく章第十八

女の道をんなのみちは陰いんにして

男おとこにしたがひ。卑ひ弱じやくを

第一だいいちとするといへとも。

國くにの政事まつりごとにおこたり。

家事かじ治をさまらず其土地そのとちに

凶きよう悪あくあるは。皆みな主君しゆくんの

慎つしあしきより。天道てんどうの

憎にくをうくるものなり。

いかほど女の顔容かほかたち美麗れい

「 41 オ

「 40 ウ

「 40 オ

「 39 ウ

にして。主君しゆくんの心こころに

かなふとも。婦徳ふとくなき

婦人ふじんは。こゝろざし恣ほしに

驕おごり國くにをほろぼし。

家いへをみだる例ためしすくな

からず。殷いんの世よの亡ほろるや

姐だう己きより起おこり。周しうの

世よの亡ほろるや褒ほう姒しより

起おこる。其外そのほか學がくてかぞふ

べからず。婦人ふじん賢けん明めい

なれば。君善きみぜんにすゝみ。

家治いへをさり國平くにたいなり

「 42 ウ

「 42 オ

「 41 ウ